

【根拠資料2-5】

教育学部学生調査 2016 年度後期結果

※経年変化を見るために、同一サンプルでセメスター間の平均値の有意差を見る際には、対応のある t 検定を用いた。

1 年生 (46 期)

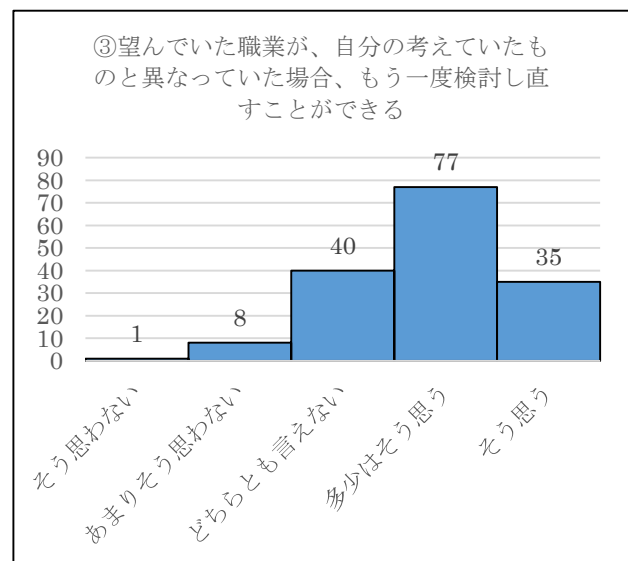
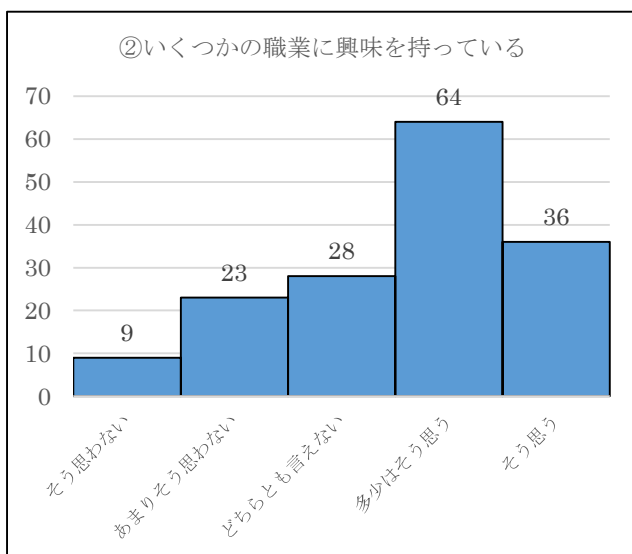
① 1 年前期「これからの4年間で学びたいことがはっきりしている」から、1 年後期「在学中に学びたいことがはっきりしている」にかけて、得点が有意に上昇していた（前期：3.85、後期：4.02、 $t(179)=-2.373, p<.019$ ）。一方で、1 年前期「これからの4年間の学びの準備ができています」と、1 年後期「在学中にすべきことの計画ができています」の間には有意な差は見られなかった。（前期：3.16、後期：3.05）。1 年前期から後期にかけて、在学中に学びたいことの意識はより明確に形成されているが、具体的な行動計画にはさほど反映されていない可能性が示唆された。

② 「将来の進路（キャリア）について見通しがある」において、1 年前期から後期にかけて、有意に下降していた（前期：3.88、後期：3.69、 $t(179)=-2.660, p<.009$ ）。1 年後期には、入学当初思い描いていた将来の進路の見通しが若干揺らいでいる可能性が示唆された。

2 年生 (45 期)

① <汎用的スキル>において、1 年後期と 2 年後期で得点に差があるか比較したところ、「パソコンを上手に使って情報の収集・加工・伝達ができる」（1 年：3.01、2 年：3.28、 $t(141)=-2.906, p<.004$ ）、「必要な情報は自分で収集できる」（1 年：3.44、2 年：3.70、 $t(140)=-2.761, p<.007$ ）のみで、有意な上昇が見られた。2 年次には、PC 操作や情報収集のスキルが 1 年次より身に付いたと感じていると推測された。

②<進路選択における自己効力感>の、「いくつかの職業に興味を持っている」において、「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答した学生が 2 割であった。「どちらとも言えない」と回答した学生も含めると、3 割以上の学生が、複数の職業に興味を広げない、あるいは広げるのが難しい状態であることが



示された。

③<進路選択における自己効力感>の、「望んでいた職業が、自分の考えていたものと異なっていた場合、もう一度検討し直すことができる」において、「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答した学生は1割にも満たないほど少数であったが、「どちらとも言えない」と回答した学生も含めると、約3割に上った。これは、教員志望の学生の場合は、大学の授業や、インターンシップなどを通して教員という職業の見方が変化しても、教員志望を再検討し直す、また②もふまえると、他の職業にも目を向けることに自信が持てない学生が一定数いることを表していると考えられた。

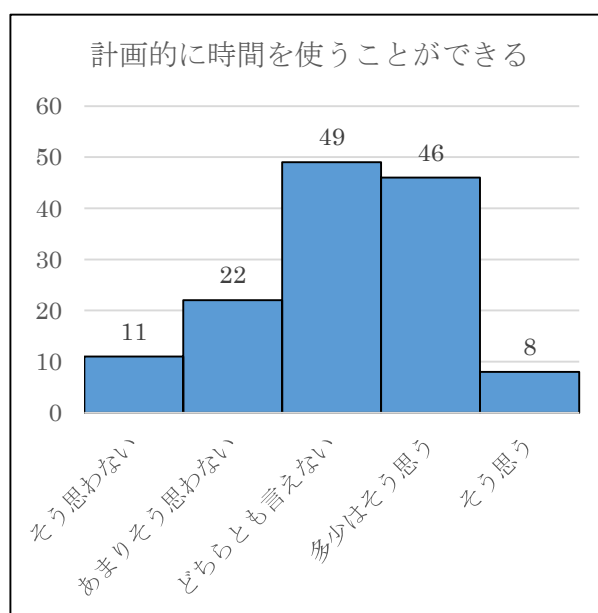
### 3年生 (44期)

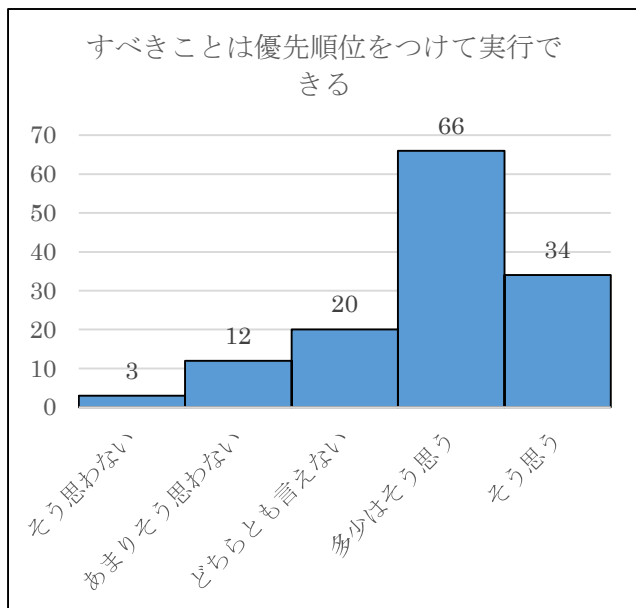
①2年後期の<汎用的スキル>と、3年後期の<社会人コンピテンシー>の間に、中程度の有意な正の相関が見出された ( $r=.441, p<.00$ )。汎用的スキルを身に着けている学生ほど、社会人としての基礎力もより身に着いていると自己認知していることが示された。

②<社会人コンピテンシー>と<展望>の各項目との相関関係はそれぞれ、「在学中に学びたいことがはっきりしている」 ( $r=.277, p<.00$ )、「在学中にすべきことの計画ができています」 ( $r=.343, p<.00$ )、「将来の進路(キャリア)について見通しがある」 ( $r=.314, p<.00$ )であり、有意な正の相関が見られた。社会人として基礎力を身に着けていると自己認知している学生ほど、大学生活の展望や、将来の見通しをより明確に持っていることが示された。

### 4年生 (43期)

①<セルフ・マネジメント>の、「すべきことは優先順位をつけて実行できる」において、7割以上の学生が「多少はそう思う」「そう思う」と回答している。一方で、「計画的に時間を使うことができる」においては、「多少はそう思う」「そう思う」と回答した学生は3割強に留まっている。やるべきことの優先順位つけに対しては自信があっても、時間の使い方の計画性については自信がない、または反省点があると感じている学生が一定数いることが示唆された。





**3年間のデータの分析**

① 1年前期の学習方略得点において、入学年度により差異があるか検討するため、一要因の分散分析やt検定を実施した。

・<基礎的な学習方略>のうち、3年間連続して1年前期に実施した2項目（分散分析）

	入学年度			多重比較による有意差
	14年度	15年度	16年度	
分からない単語や用語は調べる	3.73	4.08	4.18	14年度<15・16年度
大事な話はメモやノートを取りながら聞く	3.90	4.20	4.01	14年度<15年度

入学時点においては、14年度生（現3年生）よりも、15年度生（現2年生）、16年度生（現1年生）のほうが、これらの基礎的な学習方略を用いているとより強く認知している。

・<基礎的な学習方略>のうち、15年度、16年度の1年前期に実施した項目「内容を覚えるため、ノートを何度も書き写しながら勉強を進める」では、15年度生よりも、16年度生のほうが、ノートの書き写しの勉強法を用いていると強く認知している。

	入学年度		t検定
	15年度	16年度	
内容を覚えるため、ノートを何度も書き写しながら勉強を進める	2.85	3.17	t(375)=-2.568, p<.05

・<モニタリング方略>は、15年度、16年度の1年前期に実施した。<モニタリング方略>の合計得点では、入学年度による差は見られなかったが、「ある物事について勉強するときには、他の様々なものと結びつけながら考える」においてのみ、15年度生よりも16年度生のほうが有意に得点が高かった。

	入学年度		t検定
	15年度	16年度	
ある物事について勉強するときには、他の様々なものと結びつけながら考える	3.41	3.65	t(357)=-2.591, p<.01

・<プランニング方略>は、15年度、16年度の1年前期に実施した。<プランニング方略>の合計得点では、入学年度による差は見られなかったが、「1日にどれくらい学習するか考えてから取り組む」にお

いてのみ、15年度生よりも16年度生のほうが有意に得点が高かった。

	入学年度		t 検定
	15年度	16年度	
1日にどれくらい学習するか考えてから取り組む	2.9144	3.1263	t(375)=-2.039, p<.05

上記より、ここ3年間で、新入生の基礎的な学習方略の定着度は上がっている（と自己認知している）と言える。一方で、モニタリング方略やプランニング方略などの、より高次の学習方略に関しては、入学時点では年度により大きな差は見られないと言える。

②現4年生の、2年後期から4年後期にわたる進路選択に対する自己効力感の項目内の相関関係

・3年後期にいくつかの職業に興味を持っているほど、4年後期に望んでいた職業に就けなかった場合に対処できる感覚がある ( $r=.447$ )。この対処できる感覚が強いほど、望んでいた職業が自分の考えていたものと異なっていた場合に再検討する自信を持っている ( $r=.412$ )。また、この再検討する自信と、3年前期時点で、進路・就職に関しての学内の相談窓口を利用できる自信には正の相関がある ( $r=.275$ )。

・2年後期時点で、自分が従事したい仕事内容を調べられると感じるほど、自分に合った職業選択に自信があり ( $r=.460$ )、その職業選択の自信は、3年後期の職業を1つに絞り込める自信と正の相関がある ( $r=.290$ )。絞りこむ自信があるほど、いくつかの職業への興味は薄れる ( $r=-.195$ )。

上記を教職志望の学生の状況に置き換えると、3年後期の時点で教員以外の職業に興味を持っている学生のほうが、4年後期で教採不合格など、教員になれなかった場合に対処できる感覚を持てることが示されている。言い換えると、2年生の時点で、自分に合った職業は教員だと感じ、教員一本に絞る自信がある学生ほど、教員以外の選択肢に対して興味を持たない傾向があり、それは4年後期の時点で、教員の道に進めなかった際の対処に自信を持ちにくくなる。

※ この結果はすべて相関分析で出されたため、相互関係のみの言及に留まる。今後、パス解析などを用いて因果関係を検討する予定である。

